李白と鮑照

向島成美

一

「大雅久しく作らず、吾衰えなば竟に誰か陳べん」といい、「我が志は刪述に在り、輝を垂れて千春を映さんとす」という「古風」其一における李白の發言は、詩歌のよき傳統を後世へ傳えようとする彼の文學者としての自覺を表明したものとして有名であるが、彼はまた自己のそうした創作態度を裏付けるように、先人の殘した文學作品を學ぶことに實に意欲的であつた。彼は、自らが高く評價した漢魏の詩人達によく學ぶばかりでなく、「建安より來は、綺麗にして珍とするに足らず」（「古風」其一）と一蹴した六朝詩人の文學遺産からも多くのものを得ている。むしろ李白にとつて、六朝詩人は、彼の文學形成の上で缺かせぬ存在であつたはずであり、中でも宋の鮑照（四一四？～四六六）は、李白に最も大きな影響を與えた詩人の一人であつたと思われる。

杜甫が「春日　李白を憶ふ」の詩で、李白の詩を評して、「俊逸なるは鮑參軍」といい、また宋の朱熹が「朱子語類」〈巻一四〇〉に「鮑明遠　才は健、其の詩は乃ち選の變體なり。李太白は專らこれに學ぶ」というように、兩者の關連は、古來しばしば指摘されてきたことではあるが、次に私は、李白が鮑照から最も大きな影響を受けていると思われる樂府を中心に、兩者の關わり方を見てみたい。

二

まず最初に、李白自身が鮑照をどのように見ていたかという點に、少し檢討を加えておこう。李白の鮑照に對する關心は、次のような例に窺える。

(1) …覽君荆山作、江鮑堪動色、清水出芙蓉、天然去雕飾、…

〈經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰・王琦注「李太白全集」卷十一〉

(2) 梁有湯惠休、常從鮑照遊、峨眉史懷一、獨映陳公出、卓絶二道人、結交鳳與鱗、…

〈贈僧行融・卷十二〉

(3) 君同鮑明遠、邀彼休上人、…

〈酬裴侍御留岫師彈琴見寄・卷十九〉

(4) …蓋壯志而未就、期老成於他日、且能傾產重諾、好賢攻文、卽惠休上人與江鮑往復、各一時也、…

〈江夏送倩公歸東漢序・卷二十七〉

これらの作品の制作時期についてみると、黄錫珪の「李太白編年詩目錄」(作家出版社・一九五八年)では、(2)と(3)を乾元元年(七五八)の作とし、(1)と(4)を上元元年(七六〇)とする。また詹鍈の「李白詩文繫年」(作家出版社・一九五八年)によれば、(2)を開元二十二年(七三四)とし、他の(1)、(3)、(4)はすべて乾元二年(七五九)の作とする。(2)については兩者の間にかなり隔りが見られるが、他については時期的にほぼ近いものであり、李白が永王璘の事件以後、江夏一帶の地にいた頃の作と考えられる。李白の鮑照に對する言及が、このように彼の晩年の作品に集中して見られることは、興味ある事柄である。

さてこれらの作品において鮑照は、「江鮑」の「江」、つまり梁の詩人江淹と並稱されたり、僧侶湯惠休と親しく交遊した詩人として取りあげられていて、李白は彼に對する評價を直接には述べていない。しかし李白が鮑照に深い敬敬を拂っていたことは、これらの例からも確實に讀みとれるだろう。特に(2)の詩において、李白は、僧行融と自己との交遊を、湯

惠休と鮑照、史懐一と陳公、つまり陳子昂との交遊に比擬しようとしているのであり、そこには李白の鮑照に對する關心の程が十分に窺える。

また李白が鮑照に言及するとき、しばしば湯惠休との關連において見ようとしていることは、注目すべきである。湯惠休は單に僧侶というよりは、當時の著名な詩人の一人であり、鮑照との交遊は、彼らの間に三首の贈答詩（鮑照「秋日示休上人」「答休上人」、湯惠休「贈鮑侍郎」）があることによつて知られる。そして彼らの詩風は、宋末の孝武帝、明帝の時代、一世を風靡したものであつたらしい。「南齊書」文學傳論の「休・鮑は後れて出で、咸な亦た世に標す」や、鍾嶸が「詩品」鍾憲の條に憲の言として引く「大明・泰始中、鮑・休の美文、殊に已て俗を動かす」は、そのことを物語るものである。湯惠休の詩は、丁福保の「全宋詩」卷五に九首を收めるばかりであるが、鍾嶸が「淫靡」（「詩品」下品）といい、顏延之が「委巷中の歌謠」（「南史」顏延之傳）というように、現存のものだけについてみても、「江南思」「楊花曲」「白紵歌」など、當時の民歌をとり入れたものが多く、その詩風は華麗である。そして鮑照もまた雄健さの反面、華麗な詩風を兼ね具えていた詩人であり、また當時の民歌、つまり吳聲歌曲、西曲を大いに取り入れた詩人であつた。鮑照と湯惠休が當時よく併稱されたということは、彼らが當時の民歌を取り入れたことと關係があつたはずであり、李白の鮑照に對する關心の一つは、ここにあつたと思われる。李白が、六朝の詩人中、齊の謝朓に深い傾倒ぶりを示したことは、よく知られるところであるが、鮑照もまた李白にとって最も尊敬すべき對象の一人として意識されていたといってよい。

三

李白が鮑照から最も大きな影響を受けたのは、樂府においてである。彼らは共に樂府に大きな關心を示し、積極的にその制作に當つている。彼らの詩集で樂府が占める割合を見ても、李白の場合は、約六分の一、また樂府に近い歌吟を含めれば、約四分の一の數を占める。また鮑照の場合は、實に約半數近くを樂府の作品が占めている。このことはとりもなお

さず彼らの樂府に對する關心の深さを物語るものであろうし、事實また彼らは、この樂府に多くの名篇を殘している。彼らが共に樂府に大きな關心を示し、かつこの詩形を得意としたということは、樂府の持つ虛構性、さらには形式の自由さが、彼らの豐かなイマジネーションを發揮するのにうまくマッチしたからであり、豐かなイマジネーションという點で、彼らは確かに共通する部分を持つていたといえるだろう。

李白は、鮑照の樂府を實によく學んでいる。詹鍈の「李白樂府探源」（「李白詩論叢」作家出版社・一九五七年所收）は、李白の樂府一四九首の一々について、その源流を考察したものであるが、この「李白樂府探源」では、鮑照を源流ととくものが、十八題、二十三首に及んでいる。そのとき方は、一樣でなく、「擬」「效」「變」「用鮑體」「雜」などの區別を設けてはいるが、ともかくこれだけの作品が、何らかの形で鮑照の影響を受けているとするのである。そしてその數は他の詩人に比べて最も多い。

また歷代樂府詩の總集である宋の郭茂倩の「樂府詩集」によれば、鮑照の樂府題三十七の中、十七題が李白と共通しており、それを「樂府詩集」の分類に從つて列擧すれば、次のとおりである。（『』は、詹鍈が鮑照を源流ととくもの）

相和歌辭　吟歎曲　「王昭君」
　　瑟調曲　「門有車馬客行」
　　楚調曲　「白頭吟」『東武吟』
舞曲歌辭　雜舞　『白紵歌』
琴曲歌辭　『雉朝飛』
雜曲歌辭　『出自薊北門行』『君子有所思行』「白馬篇」『北風行』『春日行』『朗月行』『結客少年場行』『鳴雁行』『空城雀』『行路難』『夜坐吟』

雜曲歌辭の中で、「君子有所思行」「白馬篇」の二題を除く他のすべては、鮑照の作が最も古い作例となつているものであ

り、これらの中には、「出自薊北門行」「北風行」「春日行」「朗月行」「結客少年場行」「夜坐吟」など、鮑照によつて新たに設定されたと思われるものが多い。また「北風行」「朗月行」のごときは、鮑照、李白兩者の作が傳えられるのみである。また詹鍈の「李白樂府採源」は、先に擧げた同題の樂府以外で、「將進酒」「蜀道難」「鳳凰曲」「鳳臺曲」「前有樽酒行」を鮑照に學んだものであるとしていることをつけ加えておこう。詹鍈の說の妥當性はともかくも、これだけ多くの樂府題が兩者の作に共通して見られ、特に雜曲歌辭に屬するものの多くが、鮑照によって新たに設定されたものであるということだけから見ても、李白が鮑照の樂府に强い關心を拂っていたことが知られるのである。

では、李白は、鮑照の作品をどのように學んでいるのであろうか。次に具體的な作品を擧げて檢討してみたい。

代白紵曲〈其一〉鮑照（「鮑氏集」卷三）

朱脣動　　朱脣動き
素袖擧　　素袖擧る
洛陽年少邯鄲女　洛陽の年少　邯鄲の女
古稱綠水今白紵　古は綠水を稱し　今は白紵
催弦急管爲君舞　弦を催し管を急にし　君が爲に舞ふ
窮秋九月荷葉黃　窮秋九月　荷葉黃ばみ
北風驅雁天雨霜　北風雁を驅りて　天　霜雨ふる
夜長酒多樂未央　夜長く酒多くして　樂しみ未だ央ならず

白紵辭〈其一〉李白（「李太白全集」卷四）

揚清歌　　清歌を揚げ
發皓齒　　皓齒を發く

北方佳人東隣子　北方の佳人　東隣の子
且吟白紵停綠水　且つ白紵を吟じ　綠水を停む
長袖拂面爲君起　長袖面を拂ひて　君が爲に起つ
寒雲夜捲霜海空　寒雲夜に捲き霜海空しく
胡風吹天飄塞鴻　胡風天を吹きて塞鴻飄へる
玉顏滿堂樂未終　玉顏堂に滿ち　樂しみ未だ終らず

鮑照の作は、「代白紵曲」二首中の其一であり、李白の作は、「白紵辭」三首中の其一である。このうたには、鮑照以前に古辭として「晋白紵舞歌詩」三首があり、またそれは元來、南朝の民歌であつた吳聲歌曲、西曲と近い關係にあるものであつた。

さてこの二作品を比較してみると、李白の作は、題材、構成、措字すべてにおいて、鮑照の作に倣つたものといえる。最初の二句を三・三でうたいはじめ、以下の六句を七でつづる句法は、「晋白紵舞歌詩」にない鮑照の獨創になるものであるが、李白の作は完全にこれに一致しているし、また鮑照は、「窮秋」「北風」の二句で、前の部分と異質な情景をうたいあげることにより、詩全體に緊張感を與えるという獨自の手法を用いているが、李白は完全にこの手法に倣つている。強いてその相違を求めるならば、うたいだしの二句で、鮑照が「朱唇」「素袖」というのに對し、李白が「清歌」「皓齒」といいかえたあたりにはいかにも李白らしい用語の好みが窺えるし、また李白の「長袖拂面爲君舞」の句は、王琦の注に引かれる沈約の「冬白紵歌」の「長袖拂面爲君起」や、あるいは湯惠休の「白紵歌」〈其二〉の「長袖拂面心自煎」の句をふまえるものであろうが、鮑照の「催弦急管爲君舞」の句に比べれば、より穩やかさが感じられる。しかし前に見たように李白の作が鮑照の作に倣つたものであることは、明らかであるし、鮑照詩のもつ情緒は、ほぼそのまま李白の作に繼承されているといつてよい。

ところで李白が鮑照に學んだものの中で、「白紵辭」のような例はまれであり、李白の作は、鮑照の影響を受けながらも、また彼獨自の世界を作り出しているものが多い。「北風行」の場合がそれである。

代北風涼行　鮑照（「鮑氏集」卷二）

北風涼　北風涼たり
雨雪雰　雪雨ること雰たり
京洛女兒多嚴粧　京洛の女兒　嚴粧多し
遙豔帷中自悲傷　遙豔として帷中に自ら悲傷す
沈吟不語若有忘　沈吟して語らず忘るること有るが若し
問君何行何當歸　君に問ふ何くに行き何か當に歸るべき
苦使妾坐自傷悲　苦だ妾をして坐に自ら傷悲せしむ
慮年至　年の至るを慮ひ
慮顏衰　顏を衰ふるを慮ふ
情易遠　情は遠くなり易く
恨難追　恨は追ひ難し

北風行　李白（「李太白全集」卷三）

燭龍棲寒門　燭龍　寒門に棲み
光耀猶旦開　光耀猶ほ旦に開く
日月照之何不及此　日月之を照らすも何ぞ此に及ばざる
唯有北風號怒天上來　唯だ北風の號怒して天上より來る有り

燕山雪花大如席　燕山の雪花　大なること席の如し
片片吹落軒轅臺　片片吹き落つ軒轅臺
幽州思婦十二月　幽州の思婦十二月
停歌罷笑雙蛾摧　歌を停め笑を罷めて雙蛾摧く
倚門望行人　門に倚りて行人を望む
念君長城苦寒良可哀　君が長城の苦寒を念へば良に哀しむ可し
別時提劍救邊去　別るる時劍を提げ邊を救ふて去り
遺此虎紋金鞞靫　此の虎紋の金鞞靫を遺す
中有一雙白羽箭　中に一雙の白羽箭有り
蜘蛛結網生塵埃　蜘蛛は網を結んで塵埃を生ず
箭空在　箭は空しく在り
人今戰死不復回　人は今戰死して復た回らず
不忍見此物　此の物を見るに忍びず
焚之已成灰　之を焚いて已に灰と成る
黃河捧土尙可塞　黃河は土を捧げて尙ほ塞ぐ可し
北風雨雪恨難裁　北風雪を雨らし恨み裁ち難し

題の「北風行」（鮑照の集では「代北風涼行」）は、鮑照が「詩經」邶風の「北方」に想を得て、新たに設定したものと思われる。鮑照のうたいだしの二句は、「詩經」の「北風其涼、雨雪其雱」を確かにふまえている。また「樂府詩集」において、「北風行」の題で收められる作品が、鮑照・李白の二者の作だけであることは、前に述べた通りである。

さて兩者の作を比べてみると、そのうたわれる內容は、「樂府解題」に「鮑照の『北風涼』、李白の『燭龍棲寒門』は、皆北風雪を雨らし、行人の歸らざるを傷む」とあるように、遠行したまま歸らぬ夫を思う妻の情をうたうものであり、この點においては、李白はもとうたである鮑照の作にそのまま倣つているといつてよい。

しかしながら李白の作には、鮑照の作をより一層發展させたあとが見られる。島田久美子氏は、「李白の樂府」（「中國文學報」第九册所收）において、李白の樂府が從來の樂府をどのように發展させたかについて論じ、その特色の一つとして「敍事性の發展」を指摘されるが、この作品についても、確かにそのことはいえるだろう。鮑照の十一句に對して、李白のそれは二十句の長篇からなり、その物語り的性格は、鮑照の作よりはるかに强いものとなつている。また「燕山雪花大如席」「黃河捧土尙可塞」の句に窺われるスケールの大きさや、うたいだしの四句に窺われる連想の豐かさなどは、いずれも李白の特色を如何なく發揮しているものといえるだろう。

また李白のこの詩の持つ大きな特色は、句法にある。その句法は、七字句を中心にすえながら、三字句、五字句から、八字句、九字句の長い句まで、長短の句がいりまじる形をとつており、リズムは極めて奔放である。そして李白は、「蜀道難」「戰城南」「將進酒」などの作品においても、こうした句法を用いている。しかしこうした句法は、實は鮑照の作にその萌芽が見られるのであり、「擬行路難」十八首の例がそれである。李白は、鮑照の「擬行路難」に倣つた作品を三首殘しているが、詹鍈は「將進酒」「蜀道難」もやはり鮑照「擬行路難」に學んだものとしている。確かに李白の詩の持つ奔放なリズムは、鮑照から學ぶところがあつたであろう。

以上述べたように、李白は、鮑照の樂府をよく學んでおり、李白樂府の傑作とされる七言歌行などは、特に鮑照に負うところが大きかつたと思われる。李白樂府の形成にとつて、鮑照の存在は、やはり大きかつたといえる。

四

李白と鮑照の近似性について、最も早く著目したのは、他ならぬ杜甫であつたと思われる。「春日夢李白」詩に見える「清新なるは庾開府、俊逸なるは鮑參軍」の句がそれである。つまり杜甫は、李白が庾信と「清新」という點で結ばれ、鮑照と「俊逸」という點で結ばれることをいうのであるが、問題の「俊逸」の語は、文學批評用語として「清新」ほどにポピュラーなものではない。清の仇兆鰲の「杜少陵集詳註」に、この「俊逸」を一本に「豪邁」に作るとあるのは、この語の解りにくさを物語るものであろう。もし「豪邁」をとるとすれば、鮑照については、「詩品」評の「骨節は謝混より強く、驅邁は顏延より疾し」がすぐ思い起されるし、李白についても、「滄浪詩話」の「太白天才豪逸」の評語があるように、その力強さという點は、彼らの詩に共通する部分として納得できるところであろう。李白の「蜀道難」、鮑照の「出自薊北行」などは正しくその例である。

それはさておき、「俊逸」について見る時、「俊逸」とは、杜甫の李白詩引いては鮑照詩のいかなる點についての指摘であつたろうか。ちなみに杜甫の詩の中には、「俊逸」の語はこの一條しか見當らない。古い用例としては「三國志」袁紹傳注の「故九江太守邊讓、英才俊逸、天下知名」や、仇兆鰲の「詳註」に引く沈約の「太常卿任昉墓志銘」の「天才俊逸、文雅弘備」などがあるが、それらはいずれもその人の才能が優れていることをいうものである。しかし「清新」の語が、文學の內容についての評價を示すものであるだけに、「俊逸」を單に、詩人としての才能がすぐれているとするには、何か落ち着かないものを感じるであろう。また從來の評家達は、具體的な作品例を擧げ、「或ひと云ふ、太白の詩、其の源流は鮑明遠に出づ、樂府の如きは多く白紵を用ふ、故に子美云ふ、俊逸なるは鮑參軍と」〈苕溪漁隱叢話前集卷五引雪浪齊日記〉や、「還都道中」詩を評して「卽目を直書し、胸臆を直書す、いわゆる俊逸なり」〈方東樹「昭昧詹言」卷六〉などとも述べている。

では杜甫のいう「俊逸」とは何であつたろうか。私には、それは彼らの詩のもつ奇拔なひらめきを意味するもののように思われる。それは、詩の發想、あるいは措辭を含めた意味においてである。また許文雨が「文論講疏」で「詩品」鮑照

評の「景陽（張協）の諷詭を得」に注していう「此れ其の諷詭なるを評するは、猶ほ杜陵の俊逸を以て鮑に題するがごときのみ」も同様のことを指摘するものであろう。「詩品」で鮑照が張協から得たとする「諷詭」は、詩の發想、あるいは措字における新奇さを意味するものであるが、それは鮑照の豊かなイメージの發露であり、確かな造型力の所爲である。鮑照の作品の中からこうした例を擧げてみると

直如朱絲繩　直きこと朱絲の繩の如く
清如玉壺冰　清きこと玉壺の冰の如し
〈代白頭吟・「鮑氏集」巻三〉

蟻壤漏山阿　蟻壤　山阿を漏らし
絲淚毀金骨　絲淚　金骨を毀つ
〈代陸平原君子有所思行・巻三〉

雁行緣石徑　雁行して石徑に緣り
魚貫度飛梁　魚貫して飛梁を度る
〈代出自薊北門行・巻三〉

九塗平若水　九塗　平らかなること水の若く
雙闕似雲浮　雙闕　雲の浮べるに似たり
〈代結客少年場行・巻三〉

などが見られ、それらは皆鮑照の獨創になる奇拔なひらめきをもつた表現といえる。

李白の場合についてみれば、前に擧げた「北風行」の「黃河捧土尙可塞、北風雨雪恨難裁」の例を持ち出すまでもなくこうした例は數多く見られる。こうした李白の詩の持つ奇拔さについては、よく知られるところであり、杜甫の評した

「俊逸」の語の意味を發想、措辭における奇拔なひらめき、とすれば、それは確かに李白、鮑照の詩に共通する最も重要な部分であると思われる。

むろん李白、鮑照の詩には、異なる部分も多分にあり、ここではそれについて詳しくは述べないが、たとえば鮑照の詩が、著るしく感傷的であり、また異様な暗さをひめているのに對し、李白の詩が明るく、大らかであるのは、兩者の性格の相違に由來すると思われる最も顯著な差である。それは、前に擧げた「北風行」からもその一端が窺えるであろう。

しかしこうした差を含みながらも、兩者の詩は、發想、措辭において奇拔なひらめきをもつという點で共通するのであり、それはまた與えられたイメージを發展させ、自己のイマジネーションを自由に展開させる樂府にとって重要な要素となるものである。李白は當然鮑照の作品のもつこうした性格には十分關心を拂つていたであろうし、李白が鮑照の作品をよく學んだということの裏には、單に鮑照が前代隨一の樂府作家であつたからというばかりでなく、鮑照の作品の持つこうした點に強くひかれるところがあつたからであろう。李白の文學形成の上で、鮑照はやはり重要な位置を占めるものであつたと思われるのである。

（本學助手）